

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 82 号

平成 21 年 2 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

ウィリアム・バークレー

「希望と信頼に生きる ウィリアム・バークレーの 1 日 1 章」

（柳生直行訳・ヨルダン社）より（9）

7 月 7 日 ……してもしょうがない（1）

わたしたちが使うことばで一番危険なのは「……してもしょうがない」ということばではないか、とわたしはときどき思う。このことばが大きな害をおよぼす、いくつかの実例をわたしは思い出すことができる。

いつか仕事をすっかり遅れてしまったことがあった。約束があって出かけなければならないのだが、家を出る前にまだ 30 分ほど余裕があった。どうしても片付けてしまわなければならない仕事があったのである。ところがわたしが腹のなかで、「30 分しかない。これでは取りかかってもしょうがない」といっていたのである。

やらなければならない仕事があるのだが、時間が少ししかない、ということがよくある。そんな時わたしたちは、「時間がこれだけしかないのでは、はじめててもしょうがない」といって、何もやらないことが多い。

これは危険なことばである。なぜならその 30 分が無駄になってしまうからであり、さらにそのような 30 分が重なってたいへんな量の時間になりうるからである。1 週 5 日働くとして、一日 30 分

浪費するとすれば、週にして2時間半になる。1年にすると130時間であり、130時間といえば1週間にちょっと足りないくらいの量である。とすれば、なんと1週間分の時間と仕事が全くむだになってしまうわけである。

わたしの昔の先生であるJ・E・マクファディエンは、彼の住んでいるグラスゴーのポロックスシールズから、彼の教えている大学の電車のなかで、イタリア語を勉強したことを、うれしそうによく話していたものである。その区間は30分くらいのものだったと思うが、先生は毎日その30分を利用して新しい外国語を一つものにしたわけである。

30分あればできることがずいぶんある。

とにかく、やり始めることが大事である。

わたしたちはよく「やってみてもしようがない」という。仕事が大きすぎるとか、有効な方策がないとか、考えてそういうのだろう。やらなければならないことは知っている、だが「やってみてもしようがない」といって、良心の痛みをわずかにやわらげるのである。

ロバート・ルイス・スティーブソンは病弱で、そう長くは生きられないことを知っていた。だが彼はよくこういていたものである。「二つ折りの本を完成できないとしても、とにかく第1ページを書きはじめよ」。

7月15日 イエスがなさらねばならなかったこと(1)

わたしたちが神のために耐え忍びかつ受入れるべき苦しみが、たとえどんなに大きくても、イエスの受けた苦しみはもっともっと大きかったという事実である。

イエスは侮辱と中傷を受入れねばならなかった。

人びとは彼を「食をむさぼるもの、大酒を飲むもの」と呼び、また、酒税人や罪人の友と呼んだ。そこには、あんな連中とつき合っているようでは、どうせろくなやつじゃない、という意味が含まれていた。

わたしたちもときどき、侮辱され中傷されたと思うことがある。人からどんなことをいわれたとしても、イエスはもっとひどいことをいわれたのだ。罪を知らぬ唯一の人であったということに、ということ、思い起こそうではないか。

イエスは裏切りを受入れねばならなかった。

友達に裏切られた人間がいるとすれば、イエスこそまさにその人であった。友情をもっとも必要としていたとき、忠誠が無限の価値を持ったであろうときに、彼らはみな彼を捨てて逃げてしまったのである。

わたしたちも時折友だちに失望させられることがある。彼らはときどき私たちに不誠実なことをする。約束や誓約を破ることもある。それはわたしたちの心を傷つける。しかし、それはまだ決定的なものではない。

そういうことが起ったら、イエスもまた同じことを経験なされた、友人の一人が裏切って彼を死に渡したのだ、ということ、思い起こそうではないか。わたしたちにどんなつらいことが起ったとしても、それよりももっとつらいことをイエスは経験なされたのである。しかもイエスは彼らをわが子のように愛し、最後まで愛しぬかれたのである。

イエスの場合は至高の誠実が不誠実によって報いられたのである。

7月16日 イエスがなされねばならなかったこと(2)

イエスは忘恩を受入れなければならなかった。...

いざというとき、彼のために弁じ、彼の傍によりそう人は一人もいなかったのである。

イエスは誤解を受入れねばならなかった。

イエスの宣教のはじめから終わりまで、弟子たちが彼のいっていることを、ほんとうには理解していなかったことは明らかである。彼らはつねに利己的かつ野心的であり、お互いにねたんだりうらやんだりしていた。イエスがなぜ死なねばならぬかを理解できず、彼の復活に関する教えなど全く受けつけようとしなかった。

わたしたちも、自分は誤解されていると思うことがある。自分はある主張を持っているのだが、だれも耳をかしてくれないといって嘆く。だが、そのようなとき、イエスほど人びとに誤解された人間はいない、しかも彼はこれを恨んだり、そのために絶望したりすることはなかった、ということをおぼえておきたい。

イエスは本来受ける必要のない苦しみを受けねばならなかった。

イエスほどに、受ける必要のない苦しみを受けた人はいないし、また彼ほどに恐ろしい苦しみを受けた人もほかにはいない。彼はなにも悪いことはしなかった。ただ人々を愛しただけである。彼は道徳的にも霊的にも完全無欠な生涯を送りたもうた。にもかかわらず彼の地上の生命は十字架の苦しみによって奪われたのである。イエスが経験なさらなかったことで、わたしたちが経験しなければならぬようなものは一つもない。彼はそのような経験を通過したもうたがゆえに、苦しむ人々を助けることができるのである。

7月21日 回り道

人生においては回り道をして目的地に行くほうが賢明である場合が多い。人間を相手にして何かをやるときには、特にそうである。何をやるにも猪突猛進する人がいるが、そういう人は大きな間違いをおかしやすい。...

指導者がなにかをしたい、あるいは、ある変化をもたらしたいと思うようなとき、いちばんいい方法は直接的かつ過激な行動に出ることではない。人々の心にまず、ある考え方のたねをまき、それが芽をふき花を咲かせるまで辛抱よく待つのである。すると彼らは、その考え方を人から植えつけられたのではなく、自分たちが考え出したと思うようになる。従って、それを熱心に受入れるようになる。これに反して、もしはじめからその考えを無理にのませようとしたなら、彼らはこぞってこれに反対したであろう。これはよくあることである。

直接行動がかえって目的物を遠ざけてしまうのに反して、忍耐という回り道がその獲得をいっそう容易に達成させてくれる場合が少なくない。...

われわれが人生において求めるべきものは近道や早道ではなく、最善の道である。

最善の道は、しばしば、回り道やわき道をしながら忍耐強く進むという方法である。指導者としての最高の資格は、めったに見られないことだが、二つの性格をあわせもつことである。熱意と忍耐、この二つがそれである。

この二つをもつものは、間違いなく目標を達成し、しかも人々の善意ある協力をうることができるだろう。

8月8日 一歩(1)

有名な細菌学者が彼の使っていた若い女の助手のことをわたしに話してくれたことがある。約300種のミルクの見本が検査のために彼の実験室に送られてきた。それを検査するのは助手の仕事であった。この大変な仕事を請け負っている彼女を気の毒に思って、彼はいった。「荷が重すぎはしないかね?」。すると彼女はこう答えたという。「いいえ、一度に一つずつやればよいのですから」。...

たくさんの仕事をしなければならぬとき、まずなすべきことは、とにかく仕事を始めるということである。

そんなことはいわれなくても分かっている、とおっしゃるだろうが、やはりいっておく必要があるのである。たくさんの仕事を前にしたとき、ただ坐ってこれを眺めている　これが最大の誘惑である。そんなとき、われわれはなんとなく虚脱感におそわれ、ただ坐って仕事の山を眺めては、どうしたものかと考え込んでしまう。そのような場合、片付けなければならぬのが手紙書きであろうと、皿洗いだろうと、あるいはまた説教の準備、訪問、試験準備、その他なんであろうとも、まずなすべきことは、どこからでもいいからはじめることである。

はじめさえすれば戦いは半ば勝利を収めたも同然である。

つぎは、今やっている仕事に集中することである。

このような集中を決意することはけっして易しいことではない。社会に出たらどんな仕事をやらされるかというようなことばかり考えている学生、今度はどこの教区を受け持たされるだろうかとばかり考えている牧師、そういう学生はいい学生ではないし、そういう牧師もいい牧師とはいえない。

仕事をうまくやる唯一の方法は、それ以外に仕事がないかのようにやることである。そういう気持でやれば、なにも考えなくても、もっと大きな、もっといい仕事が手に入るものである。

8月9日 一歩(2)

仕事をきちんと片付けていくのは、のろくてもたゆみない着実な努力によるのであって、才気があっても永續しなくてはだめである。

イソップのあのウサギとカメの物語は、ここに書き記しておくだけの価値がある。

ある日ウサギがカメの短い足と歩みののろさをあざけた。カメは笑いながらこういった。「君がたとえ風のように速くても、競争となれば僕はきっと勝って見せる」。ウサギは、そんなことは絶対に不可能だと考えて、カメの提案を受け入れた。両者は、キツネにコースを選んでもらい、ゴールをきめてもらうことに同意した。

さて、競技の日がきて、両者は同時にスタートした。カメは一瞬も休むことなく、ゆっくりとしかし着実にゴールまでまっすぐに進んでいった。ウサギは自分の足の速さに安心しきって、競争にあまり気乗りがせず、道端で横になってぐっすり寝込んでしまった。やっと眼を覚まして全速力で走ったが、見るとカメはすでにゴールに達していて、疲れたからだを休めるために気持よさそうに眠っていた。

何百年も前に旧約の伝道者がいったように、「かならずしも速い者が競争に勝つのではなく、強い者が戦いに勝つのではない」(伝道の書9・11)。着実な努力が、結局、断続的な才気よりもはるかに多くのことを達成するのである。

だれでも人生上の諸困難に圧倒されることが往々にしてあるものだが、そのようなときただ坐って困難を眺めていてはいけない。とにかくどこでもいいからスタートしなければならない。つぎの仕事のことは考えず、手元にある仕事に集中しなければならない。

なにかをほんとうに達成するのは、たゆみない着実な努力であって、断続的な才気ではないということを、忘れてはならない。

8月12日 自己訓練(1)

ベヴァリー・ニコルズは、25歳のときに書いた最初の若々しい自叙伝の中で、ウインストン・チャーチルに出会ったときのことを語っている。ベヴァリー・ニコルズはたいへん世評の高い『序曲』という本を書いたばかりであった。「この本を書くのにどれくらいかかったかね」とチャーチルがたずねた。わかりません、とニコルズは答えた、5ヶ月以上にわたって断続的に書きましたから。「毎日きまった時間に書けなかったのかね」とチャーチルが聞いた。きまった時間に仕事をするのは不可能です、気分が乗ってくるまで待たなければなりませんから、とニコルズは答えた。「ナンセンス」とチャーチルは言った。「きみは毎朝9時に自分の部屋にはいって、こういうべきなのだ、『おれはこれから4時間仕事をする』と」。

書けなかったらどうするのですか、頭が痛いとか胃の具合がわるいとか、そういったときにはどうするのですか、とニコルズがたずねると、チャーチルは答えた。「そういうものは乗り越えなければいけない。靈感がわくのを待っていたら、老人になるまで坐って待つことになるだろう。書くこともほかの仕事、たとえば、軍隊を出撃させるのと変りはない。天気がよくなるのを坐って待っていたら、遠くまで進むことはできまい。われとわが身をけとばし、自分をむしゃくしゃさせ、だがとにかく書くのだ。それしか道はない。」

要するに、チャーチルは勤め人と同じ時間に仕事をして、天才に近いものが作り出せると確信していたわけである。そして彼自身、それが可能であることを証明したのである。

*チャーチルは政治家としてだけでなく、文章家としても有名であり、その膨大な『第2次世界大戦回顧録』などによって、ノーベル賞を受賞している。

8月18日 旅に出て(2)

人生のたびに出る人は、どうやって、どの道を通して、目的地に達するかをきめなければならない。...

旅に出る人は、途中で乗換えなければならないかどうかを確かめておかねばならぬ。

これを人生問題に当てはめていうと、今やっている仕事は単なる腰掛か、それとも最終目的か、ということである。

これだけのことははっきりいえる　とりわけ牧師の場合がそうである　つぎに移る仕事のことばかり考えていたら、いまの仕事をやうまくやることは絶対にできない、ということ。いま自分がやっている仕事は、自分にとって世界にあるただ一つの仕事である、というつもりでやるのでなければならない。そのとき　そのときのみ　つぎの仕事が折よく自然にやってくるのである。

昨日お話した昔の鉄道案内に、荷物はあまりもっていくな、と書かれていた。

人生の旅においてもそうである。イエスがいわれた通り、「たくさんの物をもっている、人のいのちは持ち物にはよらないのである」(ルカ12・15)。身が軽ければ遠くまで早くいくことができる。賢い人は、幸福は持ち物の中にはないということを、けっして忘れないだろう。持ち物に対してありがたいとは思うけれども、そこに人生最高の価値を見るようなことはけっしてしないはずである。

どこにどうやって行くかをきめ、いまやっている仕事に全身全力を打ち込み、所有物を尊びながらもそれに過度の価値をおかない

これがわれわれの人生案内である。

9月4日 疲れたか？

与える価値のあるものは必ず、何がしかの犠牲を含んでいる。

うわすべりにあっさりとやってのけたようなものは、あまり効果がない。うすっぺらな感じをまぬがれないからである。かっさいを博することがあったとしても、人の心を深く動かすことはできない。

...

簡単になされたように見えることでも、その背後にはつねに強烈な努力と準備が隠されているものだ。

これは人生のすべての領域について言えることである。たとえば、タイピストの指は素晴らしい速さと正確さでキーの上を飛ぶ。いかにもやすやすとたたいている。しかし、その背後には長年の訓練がかくされているのである。

同様に、説教や講演がやすやすとなされているように見えることがある。その説教者や講演者は伝達の天才、ことばの魔術師でもあるかのように思われる。が、その背後には準備と練習がかくされているのであって、これなしには完成は望めないのである。

努力なしに効力を持つようなものはこの世にはありえない。...

イエスは長血をわずらっている女を助けたとき、自分の体から力が出て行くのを感じたもうた（マルコ 5・30）。自分の体から、みるみる力が抜け出ていくのを感じられた。

人を助けるためには、苦しむもののなかに入ってゆき、彼と全く一つにならなければならない。だからマタイはイエスに関する予言のことばを引用していっている。「彼は私たちのわずらいを身に受け、わたしたちの病を負うた」（マタイ 8.17、イザヤ 53・4）

人びとを助けることは、イエスにとって、犠牲をともなうことであつた。われわれにとっても同じである。